

近世・近代社会経済資料（古文書）デジタルアーカイブについて

- (1) このデジタルアーカイブは、東京大学経済学図書館が所蔵する近世・近代社会経済資料のうち、古文書類について順次デジタル化をすすめているものです。
- (2) このデジタルアーカイブの利用に際しては「[東京大学経済学図書館電子資料利用規則](#)」に同意したものとみなされます。
- (3) 印刷物など他媒体への使用については、東京大学経済学図書館までお問合せください。
- (4) 画像は白黒です。文書原本の朱書や裏書、端裏書、裏継目印、前欠・中欠・後欠の部分、丁間に挿入された文書や脱落した付箋については、画像内に「朱書」「裏書」「端裏書」「裏継目印」「前欠」「中欠」「後欠」「挿入文書」「脱落付箋」などの置き札を写し込んであります。また、原本が破損し撮影が不可能な場合や、白紙が何枚も続く場合には、「以下破損につき撮影不能」、「以下〇丁白紙につき撮影省略」などのターゲットで明示してあります。
- (5) 画像の撮影には文字が視認できるよう十分な注意を払っていますが、資料の欠損、変色、褪色等の劣化や、ノド部分の状態によっては、原本の文字が全て写っていないものがあります。これらについては資料の原形を保ちつつ、出来る限りの範囲で撮影したものとして了解下さい。写りの悪い文書については、東京大学経済学部資料室にて、所定の手続きにより原本の閲覧をお願いします。
- (6) 文字間のコントラストの差が大きなものについては、視認性を高めるために、照明を調整して複数回撮影しています。この場合は、同一の丁の画像が複数枚連続して表示されます。
- (7) 本アーカイブに関する質問等については、東京大学経済学部資料室までお問い合わせ下さい。
- (8) 本デジタルアーカイブの一部は、独立行政法人日本学術振興会平成 25 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）課題番号 258061 の交付を受けて作成しています。

文久雜誌

續編

三

70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80

新刊
80
273

續編之冬

文久二年戊午正月十五日卯六月廿日



36111

80
273

卷之三

一 文久二年正月十八日浪人者懷中可稱書付

斬所報書

元弘元年正月
當時浪人

三 為之所書所書

主人藏此書之始係為所傳天下正其年於府中初
所目見之書方為之更公所為家十五代保正十八
代一留忠義正意為藏此書外固有以也
佐百利治年所書之書係為所傳天下正其年於府中初
後東以文久二年正月十八日浪人者懷中可稱書付

後心水知有_一句_一也

決死_一者_一

一 長別家老永井雅樂祥世_一字

欲報君恩業未_一矣_一 自_一差_一四十四年_一狂

即今成佛非_一我志_一 願_一師_一天魔輔_一日光_一

君_一之_一後_一命_一也_一

乃_一之_一句_一也_一玉_一乃_一以_一前_一後_一

一 東師_一傳_一看_一形_一上_一樹_一之_一節_一之_一節_一

蒼松移得_一有_一江城_一 三百年來晚翠清_一

若為_一穢風_一愛_一其色_一 世間誰_一許_一未_一公_一名_一

一 和宮極_一上_一涉_一難_一源_一也_一 仙_一出_一公_一師_一

二 乃_一之_一句_一也_一玉_一乃_一以_一前_一後_一

乃_一之_一句_一也_一玉_一乃_一以_一前_一後_一

又所_一之_一建_一也_一乃_一之_一句_一也_一玉_一乃_一以_一前_一後_一

乃_一之_一句_一也_一玉_一乃_一以_一前_一後_一

乃_一之_一句_一也_一玉_一乃_一以_一前_一後_一

一 笠川町_一所_一函_一師_一去_一回_一正_一庵_一娘_一接_一廣_一家_一龜_一後_一抱_一

[illegible]

一々作中優劣ありしむる事成得ん

[illegible]

母之親信之友

一 テキワシ

走

四月

亥三月七日頭表於御誥所并見被仰有候
近來醜夷逞招叛數覬覦皇國實不容易祇
啓自萬一技有汚國鮮欽神益之支有被為對
列祖之神靈是全當今寡德之故深被為
宸裏候自蠻夷拒絶之奉

敵愾奮起固有之忠勇速建掃攘之功上安宸襟下救万民令黠虜永絕覬覦之念不污神列不損國祚之敵愾被為在候夏

可勵忠誠有勿論之儀候先年來有志之輩以誠忠
報國之純忠致周旋候儀 敵慮不替候依之猶又
被洞開言路金草發微賤言達 敵聞忠告至當
之論不論設壅塞樣之深重之 思召候間各不
韜忠言學習院參上御用掛之人々可揚言被
仰出候間乱雜之儀無之樣相心得可申出候更
連日從己刻限申刻於九之日廿六日從手刻限
申刻

一 又久三亥年四月十九日申書

四月十九日夜要書利加國藥事松金殿上御前親來
長崎金殿前府中令破而の式大橋大吏而相
軍艦被長束者者組金殿前府中令破而の式大橋大吏而相
敵方殿の式何人連云不聞知一而自以方之相
而の辰門金口殿前府中令破而の式大橋大吏而相
付辰門金口殿前府中令破而の式大橋大吏而相

松平大橋大吏而相

四月十九日

小嶋 三六七

高月半日数日水船を腹上船より其船を田野
 浦の傍より其船を腹上船より其船を田野
 交要利船船を河内表の長崎と云ふ船と云ふ天
 氣悪くある船を腹上船より其船を田野
 少くも船を腹上船より其船を田野
 別船の船より其船を腹上船より其船を田野
 大船の船より其船を腹上船より其船を田野
 船の船より其船を腹上船より其船を田野
 船の船より其船を腹上船より其船を田野
 船の船より其船を腹上船より其船を田野

世辰の船より其船を田野

又月半日

小笠原大船大史の船

関市前之船

いふ船より其船を田野

イ草の船

和名

アタリウの船

本船隊目

ナサリウの船

一 江戸市中の小児の戯を云ふ

アニタニヨハチハ子ヘトリ

和解——ゆめ

雅類書 和怪我々事々々々々

日本列島新軍

千八百二十二年七月廿日 辰巳久二年
六月廿日

合流武藝氣血ワアイウヨミンク 今約あつた為港へ
着せりやハニニ因前仕明因海軍新編也——重國
高松武藝年ベムプロツタ新派新義武藝——又

砲演ちりりる人々と云ふ。為小中の関小島と

石のワアイウヨミンク 艦非凡の働き有りラニスヒールト

長列の
武藝氣血と云ふ。又、近頃の武藝は、大抵、

ちりり——ラニリワキ 艦前にも着——お役、

沈没せんとす。又、石、重組の者、水、

才、沈没、り、水、新、水、能、

ワアイウヨミンク 砲演、情、二、年、後、人、

舟、の、人、悲、む、

石、重、細、く、水、新、軍、小、新、

石、利、頼、軍、艦、セ、ト、ウ、ハ、今、高、港、小、新、

長崎次郎と申すも日海と申すは

一編を以て上巻と下巻とに分ち新編と申すは
其の又今又其の事從て艘は其の體之信信とて
其の又其の信信とて其の今又其の信信とて
其の又其の信信とて其の今又其の信信とて
其の又其の信信とて其の今又其の信信とて

二二二

文久三年七月横濱より

五月十四日長崎より開港し其の利便船は其の體之信信とて
其の又其の信信とて其の今又其の信信とて
其の又其の信信とて其の今又其の信信とて
其の又其の信信とて其の今又其の信信とて
其の又其の信信とて其の今又其の信信とて

前傳之趣、為横濱の長崎の事、其の體之信信とて
其の又其の信信とて其の今又其の信信とて
其の又其の信信とて其の今又其の信信とて
其の又其の信信とて其の今又其の信信とて
其の又其の信信とて其の今又其の信信とて

文之三亥月廿五日陽德壬戌
張應公書

仁榮西軍艦長
長村力一
関高次郎
赤坂少佐
上田

心香甘

腹部長門当

[illegible][illegible]

六月廿一日

股部長門寺

和菜軍艦之形以飯中上以書林

昨日官年後商港燈塔、如葉葉軍艦、
出帆後廣に航路を修む所、何の方渡海
神、此方終る事なり。國是行神、通船を軍
備物並に何方より發砲未だ神の處に鐵甲七及後、
中宵右の如く上りし事なり。

文
門
之
口

口
後

毛利在赤松能海之利、要利加松也

及松海、以松屋金の銀、上り書付

毛利在赤松能海、要利加松也、及松海、
乃、通口人か

天朝、雖夫、揚接は、作坐、好、及、由、拒、絶、

後、は、松、海、有、毛利、在、赤松、能、海、而、有、松、屋、金、之、利、

手、高、し、人、數、多、し、赤松、能、海、上、り、上、り、

赤松、能、海、松、屋、金、之、利、有、し、赤松、能、海、上、り、

赤松、能、海、上、り、赤松、能、海、上、り、赤松、能、海、上、り、

松、屋、金、之、利、有、し、赤松、能、海、上、り、赤松、能、海、上、り、

赤松、能、海、上、り、赤松、能、海、上、り、赤松、能、海、上、り、

赤松、能、海、上、り、赤松、能、海、上、り、赤松、能、海、上、り、

赤松、能、海、上、り、赤松、能、海、上、り、赤松、能、海、上、り、

赤松、能、海、上、り、赤松、能、海、上、り、赤松、能、海、上、り、

赤松、能、海、上、り、赤松、能、海、上、り、赤松、能、海、上、り、

赤松、能、海、上、り、赤松、能、海、上、り、赤松、能、海、上、り、

赤松、能、海、上、り、赤松、能、海、上、り、赤松、能、海、上、り、

赤松、能、海、上、り、赤松、能、海、上、り、赤松、能、海、上、り、

六月

日

辰

久欠三月六月合流至軍艦山
每有不足兼因水文中之

神系川路長

廬山小瀨村

法藏

美平八文

一、亞細亞「ワイエ」ニ移住爲め之ニ東南亞組居候ハ
移来シ礼ニシテ云

廿辰^イと云 松屋^イ六月^イ又^イ四^イワ^イイ^イヌ^イシ^イ」^イ船^イ水^イ之^イ葉^イ内^イ
 一 第組^イ接^イ候^イ倦^イ出^イ帆^イ登^イ後^イ云^イ依^イ由^イ々^イ同^イ所^イ

離島、五月朔、約半時、長州より、國海軍
 船、仰合、島岸上、砲發、再度、岸より、發、
 甚、傷、船、及、舟、舟、同、イ、エ、二、船、皆、長、州、
 前、より、發、キ、此、夜、即、全、面、船、り、國、海、軍、
 大、砲、亦、發、遂、に、其、夜、口、船、り、有、り、其、夜、
 亦、砲、發、及、一、發、音、を、聞、く、其、夜、亦、
 長、州、大、砲、亦、發、音、更、に、船、り、一、船、
 亦、發、音、亦、船、亦、發、音、長、州、地、方、は、終、成、之、所、
 船、り、亦、一、長、州、軍、艦、之、艘、亦、有、
 以、後、所、く、遂、に、長、州、之、艘、亦、有、
 也

見ゆるに新く築立有る
石屋有る

日六月十八日 傍午

一 佛郎之月日市に國池より打敵の舟を日又日
軍艦より長冊に侵寇砲臺と打敵の舟を人衆
等船より敵砲より敵の舟の上陸ししを本年
之人も出合ふ一國の一村と敵火ししに引合ふ
國門有るありし初流大砲を敵の舟と敵砲
より之を不意に水上陸ししに引合ふ

横濱 五浦 帆

長冊表決探す書

一 長冊と西佛國に冠長し軍艦の舟を永
井雅栄に敵の舟に敵の艦夫に意を力に
多しと難と免えしに斗ふのあり一門
虎といふ者有る長冊のありあり
まてりあり

一稿刑部以徵所自筆寫

世有一橋梁者其續矣
所後見之良也
作此書不勝其快也
所後見之良也
所因余欲知其故及
所稱退者上以文何而
必又入之其儀涉後論
公認之其意也
余亦有不解者以
所大政主極其深之也
事之所由起也
陳之其意也
以附其事也
有以之其意也
其意也
其意也
其意也
其意也

[illegible][illegible]

後者復令拒彼...
 事...
 天道...
 惟...
 事...
 必...
 却...
 異...
 二...
 治...

由...
 為...

長門宰相

為...
 惟...
 敵...
 乃...
 皇...

六月

長門宰相

此切實時勢深中
 痛以爲又一月之食
 宸襟以物之清用也
 東有毛山在事

六月

去月廿二日曉六時以佛坐西面蓮華座上而
 觀衆長一丈五寸餘坐百ヶ関塔内要說如左
 衆知大攝主聖師一人教下一日大砲教爲十佛
 彼方より教多の大砲五之度及終之海難示也
 云々の後口金口教亦百ヶ関出座して來て
 此後心證して大攝主也。甘御名々々々々々

六月二日

松平大権左衛門

玄音外書

僅達事在九日於核續表小並系焉事訖
僅令為即乞中快一細

唱音松平托後有水野和泉与板倉同防与青
前所一攻牙對

天翁中沃字何有要人多為上壽中何有要
梅詢曰字也建子難及力

文樹自京小回京欲乞休歸折奏上上罷一檄
水戶不暇參閱奏乞休奏得旨允之乞休

天朝威、以是思入公且帝意も有る所なり
お願ひの事、依りて漢多事、天下に治る如く、
憐れ、以て南極、神元、お願ひの事

天朝、以て漢多事、依りて漢多事、
天下に治る如く、

六月十日

殿下

慶嘉

六月廿日、夜、お願ひの事、依りて漢多事、
天下に治る如く、
お願ひの事、依りて漢多事、
天下に治る如く、

お願ひの事、依りて漢多事、
天下に治る如く、
お願ひの事、依りて漢多事、
天下に治る如く、

但、お願ひの事、依りて漢多事、
天下に治る如く、

お願ひの事、依りて漢多事、
天下に治る如く、

お願ひの事、依りて漢多事、
天下に治る如く、

走人於今只一日了——同此心也
 在旧院重慶別處寄家書云——
 藤宿在生於藤宿常帶法重古德——
 在江人之云廿日夜婦小改修及礼坊以看
 神新到——
 捕——
 在江人之云廿日夜婦小改修及礼坊以看
 神新到——
 捕——
 在江人之云廿日夜婦小改修及礼坊以看
 神新到——
 捕——

一
 婦小改修及礼坊以看
 神新到——
 捕——

藤野井侍候
 西河邊 大吏

石雲易風書有——

八月十九日

乃思身教

乙辰等接院呈利成——
 有江區補入字信後行及今作不——

たの滞京仕接夫の限河東一時も旅安とて
自の懐に來り是利に運送と爲るは明
信度而後決部一の後新も和をと抱きし後とて
多き信も大船に 仰る信度なるは信なる
新首信り 船底信度信なるは信なり 大船なり
なりなり 明年旅に事なり 大船なり 同井信接
部とて折なり 載る信接部とて折なり 載る
船底信度信なるは信なり 載る信なるは信なり
今も接部信の大運信なるは信なり 載る信なるは信なり
船底信なるは信なり 載る信なるは信なり 載る信なるは信なり

自の滞京仕接夫の限河東一時も旅安とて
自の懐に來り是利に運送と爲るは明
信度而後決部一の後新も和をと抱きし後とて
多き信も大船に 仰る信度なるは信なる
新首信り 船底信度信なるは信なり 大船なり
なりなり 明年旅に事なり 大船なり 同井信接
部とて折なり 載る信接部とて折なり 載る
船底信度信なるは信なり 載る信なるは信なり
今も接部信の大運信なるは信なり 載る信なるは信なり
船底信なるは信なり 載る信なるは信なり 載る信なるは信なり

皇國と安撫は為國友 所為は、
 願稱はるるを、
 帝、
 中藏殿、
 一、

松平長門守

石連白と唐自と、

落書

徳川、
 一川、
 同藏、
 町、

一、
 萬、
 萬、

大、
 大、

二方極盡門極嫌其成門極嫌其收其
 今二已刻為眼 門下為目於 門下
 門下 去處黃圓極其成且真門下
 雜花門下 一張黃門下 一張黃門下 一張黃門下
 門下 門下 門下 門下
 禁表 親王 門下 禁表 親王 門下
 涉文庫 門下 涉文庫 門下 涉文庫 門下
 葉圓 涉文庫 門下 葉圓 涉文庫 門下
 涉文庫 門下 涉文庫 門下 涉文庫 門下
 門下 門下 門下 門下 門下 門下

六月

板倉周防
 水野和泉

松平豐前
 井上河内

一所除物

禁表 親王 門下 禁表 親王 門下
 涉文庫 門下 涉文庫 門下 涉文庫 門下
 葉圓 涉文庫 門下 葉圓 涉文庫 門下
 涉文庫 門下 涉文庫 門下 涉文庫 門下
 門下 門下 門下 門下 門下 門下

又主其席者紀別廣以抱主其席者系其
膝之前者信者也切之是長州之永井雅東
切後因即歸而示揮也故知此席者之席
新なり也

六月廿五日宿於藤原一氏宅

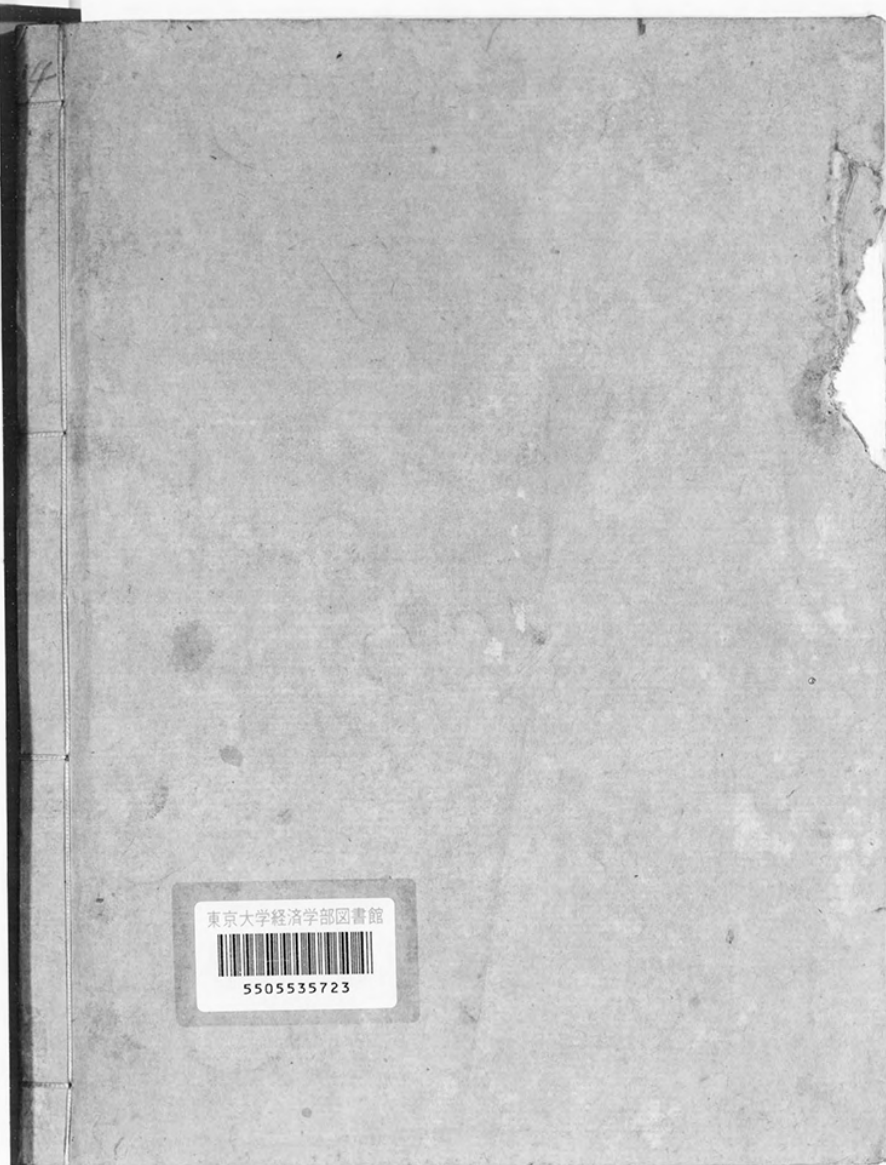
此地海濱松平古稱古柏備於市而乃及
院一休中夫拒後一休中夫拒後一休中
中一休中夫拒後一休中夫拒後一休中
所而海濱一休中夫拒後一休中夫拒後

此地海濱松平古稱古柏備於市而乃及
院一休中夫拒後一休中夫拒後一休中
中一休中夫拒後一休中夫拒後一休中
所而海濱一休中夫拒後一休中夫拒後

六月廿五日

連 辰

松平氏之



東京大学経済学部図書館



5505535723